転移性上顎洞癌の一例

世良 公志¹⁾・夜陣 紘治²⁾・田頭 宣治²⁾・平川 勝洋²⁾
永澤 容²⁾・原田 康夫²⁾・中川 仁³⁾

A Case of Metastatic Maxillary Cancer from
Sigmoid Colon Cancer

Koji Sera

(Futami Chuo Hospital)

Koji Yajin, Nobuharu Tagashira, Katsuhiko Hirakawa,
Yutaka Nagasawa, Yasuo Harada and Jin Nakagawa

(Hiroshima University)

A rare case of sigmoid colon cancer that metastasized to the maxillary sinus was reported. The patient was a 74-year-old female with complaints of left cheek swelling and pain. She had undergone an operation for adenocarcinoma of sigmoid colon four years earlier. She also had metastases to the right lung and liver. A biopsy of maxillary tumor revealed that the maxillary tumor was metastatic adenocarcinoma. The patient was treated with radiotherapy, but died about 7 months later.

Key words: metastatic maxillary cancer, adenocarcinoma, sigmoid colon cancer

緒 言

他臓器の悪性腫瘍が鼻、副鼻腔領域に転移する事は極めて稀である。1872年、Perls¹⁾が気管支癌の蝶形骨洞への転移を報告して以来、いくつかの文献的報告が散見されている。

しかし、これらの大部分は Grawitz 腫瘍を原発とするもので、消化管、特に結腸癌を原発巣とする報告例は極めて少ない。最近、我々は、結腸癌を原発巣とする転移性上顎洞癌の一例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者：74才。女性。

初診：昭和60年2月6日

主訴：左頬部痛。左頬部腫脹。

家族歴：特記すべき事なし。

既往歴：昭和56年5月28日、広島大学第2外科において、S状結腸癌の切除術を受けた。病理組織学的には高分化型腺癌であった。この後、昭和58年11月には肺及び肝転移を指摘されている。

現病歴：昭和60年1月末、左歯痛の為、近医歯科を受診し、歯根部膿瘍の診断にて排膿術を受けた。その後より左頬部痛、左頬部腫脹が現われ、2月6日当科を受診した。

現症及び検査所見：初診時、左眼窩下方に硬

1) 双三中央病院耳鼻咽喉科

2) 広島大学医学部耳鼻咽喉科学教室

3) 広島大学医学部第一病理学教室

い皮下腫瘍が触知され、左眼窩下方より左頬部にかけ、腫脹及び圧痛がみられた(図1)。又、鼻内所見では左中鼻道は圧排による狭小化がみられた。顔面単純及び顔面断層レ線写真では左上顎洞上部に腫瘍状陰影がみられ、左眼窩下縁には骨欠損が疑われた(図2, 3)。

また、頭部CTで顔面レ線所見を裏づける、左上顎洞前壁に一致した腫瘍陰影と前壁の骨欠損、及び頬部皮下への浸潤像がみられた(図4)。胸部単純レ線では右下葉に一致して腫瘍陰影がみられ、横隔膜との明らかな境界はみられず、肺腫瘍あるいは横隔膜腫瘍と診断されたが、入院後、CT、エコーにて肺転移と診断された(図5)。一方、腹部のCT検査では、肝両葉に low-density area が多数散在しており、肝腫瘍と診断された(図6)。入院時の全身所見では、肝が2横指触知され肝機能検査は GOT 70 U/I (正常 8-40) GPT 26 U/I (正常 0-40), ALP 268 U/I (正常 40-120) LAP 86 U/I (正常 20-55) とやや上昇を示した。その他の臨床

図2 初診時 Waters 法. 矢印の如く腫瘍状陰影をみとめる。

図1 初診時左頬部腫瘍(→)。

図3 顔面断層. 矢印の如く腫瘍状陰影をみとめる。

生化学検査所見では特に異常を認めなかった。なお、昭和60年2月 CEA が 156.73 ng/ml と極めて高値を示した。

入院後経過：3月5日当科入院し、3月6日左上顎試験開洞術を行ない病理学的診断の為、組織を採取した。開洞時、左上顎洞顔面壁には、眼窩下神経下方に骨欠損及び腫瘍がみられた。上顎洞内では、腫瘍は眼窩下壁外側方より上顎洞外側壁に存在していた(図7)。上顎洞腫瘍の病理組織像では、類円型の異型核及び比較的豊かな細胞質を有した腫瘍細胞が、明瞭な腺管を形成しつつ増殖している像がみられ、間質には著明な線維化および一部には骨組織破壊像がみられた(図8)。

個々の腫瘍細胞は、類円型の異型核が腺腔の基底膜層に並び、高円柱状、弱好酸性の細胞質をもっており、腺腔の内面には硝子像がみられ、高分化型の腺癌と診断された(図9)。昭和56年5月、S状結腸癌手術時の病理組織像では粘膜下層に浸潤した腫瘍がみられ、類円型の異型核を有し、高円柱状、弱好酸性の細胞をもった腫瘍細胞が腺管を形成しつつ増殖しており、明瞭な硝子像もみられた。これは前述の上顎洞腫瘍の病理組織像と非常に似かよった高分化型の腺癌の所見であった(図10)。以上のような病

理的所見からS状結腸癌からの転移性上顎洞癌と診断された。

治療：症例は、腫瘍が眼窩下神経に一致して存在した為と思われる左頬部痛を強く訴えた。

治療は、著明な肺転移が存在し、全身状態の悪

図5 胸部正面単純レ線。矢印の如く右下葉に一致した腫瘍陰影がみられる。

図4 CT像。左上顎洞前壁に一致した腫瘍陰影がみられ、骨欠損と共に頬部皮下への浸潤がみられる(★)。

化も考えられる事から, 積極的な手術療法は施行せず放射線療法を 6000 rad 施行した. これによって一旦, 腫瘍の消失をみたが, 7 月頃より再度, 上顎洞内に腫瘍の再発を認め, 頬部痛を強く訴えた為, ガッセル神経節ブロックを施行した. 疼痛の減少はみたものの全身状態の悪化の為, 10月13日死亡した.

考 按

頸部リンパ節を除く頭頸部領域への転移性腫瘍は少数の報告がみられるのみである. 1980年, 溝尻ら²⁾は内外の文献報告例のうち比較的

病歴の明らかな頭頸部領域への転移性腫瘍 105 例について検討を加えている. これによると原発部位では腎癌が最も多く37例, ついで神経芽細胞腫13例, 睾丸, 乳腺それぞれ9例, 消化管8例であり, 転移部位では, 鼻, 副鼻腔が最も多く34例, 以下, 甲状腺23例, 下顎骨18例, 側頭骨11例と報告されている. また, 1965年, Friedmann³⁾ は71例の耳鼻咽喉科領域への転移性腫瘍を集計し, そのうち42例の原発巣が腎癌である事, さらに31例が鼻, 副鼻腔への転移である事を報告している.

図6 肝CT像. 肝両葉に矢印の如く low-density area が多数散在している.

図7 手術時所見. 上顎洞内に矢印の如く腫瘍がみられる.

このように頭頸部領域への転移性腫瘍の原発部位としては腎癌が圧倒的に多い。腎癌は全身のあらゆる臓器、組織に転移する癌として知られているが、耳鼻咽喉科領域への転移は現在まで、他の臓器と比べて比較的少ないとされている。また、転移部位としては、鼻、副鼻腔が多く、その一因としては、頭頸部領域の中では血管組織の豊富な事があげられている。

さらに、溝尻らは鼻、副鼻腔への転移性腫瘍34例について分析を行ない、原発部位の内訳として腎が15例、睾丸5例、消化管はわずか2例であったと報告している。また、1966年、Bernstein⁴⁾は82例の鼻、副鼻腔への転移性腫瘍のうち約半数は腎臓よりの転移であり、ついで気管及び肺が10例、消化管よりの転移が5例と報告している。このように、鼻、副鼻腔へ転移する原発巣の部位としては、やはり腎臓が多く、消

化管は極めて稀であることがわかる。

本邦における鼻、副鼻腔への転移性腫瘍の報告は、我々の検索し得た限りでは表1の如くであり、本例を含めると22例である。これらの原発部位の内訳としては腎12例、子宮3例、大腸2例、肺1例、肝1例、精巣1例、胃1例、乳腺1例であり大腸癌より鼻、副鼻腔への転移性腫瘍の報告は、本症例が本邦において2例目である。

また、転移部位では鼻腔が11例と最も多く、以下、篩骨洞7例、上顎洞5例、蝶形骨洞2例、前頭洞1例の順である。更に、転移巣による症状が原発巣の症状に先行していたものが22例中、13例にみられている事実は注目し得る。

転移巣に対する治療は、病歴の明らかな14例中、放射線単独（抗癌剤投与併用を含む）が5例、手術単独4例、放射線＋手術併用3例、抗

図8 上顎洞癌病理組織所見。腫瘍細胞が明瞭な腺管を形成しつつ増殖している。

図9 図8の拡大像。腫瘍細胞では類円型の異型核が腺腔の基底膜層に並び、腺腔の内面には硝子像がみられる。

癌剤単独投与 1 例, 治療不能 1 例であり, 放射線療法と手術療法がほぼ均等に用いられている. これらの症例の予後について検討してみると, 転移巣発見以来 3 ヶ月以内に死亡した症例が 5 例みられ, また 2 年 2 ヶ月以内の死亡が 8 例であった. 生存例における治療方法は手術療法 3 例, 手術療法+放射線療法 1 例, 放射線療法 1 例, 化学療法 1 例であり, 死亡例における治療方法としては放射線療法 4 例, 手術療法+放射線療法 2 例, 治療なし 2 例であった. 生存例においては手術療法が, 死亡例においては放射線療法が多く, 本症例においても, 手術が可能であれば, 一般の腺癌と同様, 放射線感受性が低いと考えられる事から, 手術療法を優先さ

せた方が良い結果が得られるものと思われた. ただし, 死亡例においても 2 年 2 ヶ月生存した症例がみられる事から, 原疾患を考慮した適切な治療の必要性を考えさせられた.

本症例の如く大腸癌から鼻, 副鼻腔への転移経路については, 図11のように現在まで 2 つの経路が考えられている⁵⁾⁷⁾.

第一の経路としては癌細胞が大腸原発巣から肝, 下大静脈へと流れ, 右心, 肺, 左心, 頸動脈から鼻へと転移する経路である. 又, 第二の経路として Nahum ら⁵⁾ が主張しているように下大静脈から椎骨静脈叢へと向かい, 頭蓋内の翼状静脈叢, 海綿静脈叢に達し, 逆行性に鼻へ転移する経路である. 現在のところ, 第二の経

表 I 本邦における鼻・副鼻腔への転移性腫瘍の報告

報 告 者		原 発	転 移	転移巣への治療 (原発巣への治療)	経 過 (原発巣治療 後の経過)	予後
1) 雑賀 宏 ⁷⁾	1982	*大腸癌	鼻部, 頬部 顎下部, 肺	RT. 5-Fu (ope)	2 ヶ月 (2年2ヶ月)	死亡
2) 里見 佳昭 ⁶⁾	1974	*Grawitz	鼻腔, 耳下腺	ope (ope)	2 年 (2 年)	生存
3) 山本 誠 ⁹⁾	1980	Grawitz	*鼻腔, 篩骨洞	ope (ope)	8 ヶ月 (3年3ヶ月)	生存
4) 小林 秀夫 ⁹⁾	1951	hepatoma	*上顎洞	ope. RT (-)	1 ヶ月	死亡
5) 浅井 良三 ¹⁰⁾	1960	Grawitz	*鼻, 上顎, 篩骨 眼, 仙骨関節	ope. RT (RT+テスバミン)	2 ヶ月	生存
6) 河合純一郎 ¹¹⁾	1958	*Grawitz	篩 骨	ope (ope)	? (4年)	不明
7) 溝尻源太郎 ²⁾	1980	精上皮腫	*篩 骨	RT. chemo (ope)	2年2ヶ月	死亡
8) 松崎 久 ¹²⁾	1967	*絨毛上皮腫	鼻中隔	不 明	不明	不明
9) 渡辺 雄司 ¹³⁾	1981	Grawitz	*鼻 上顎篩骨, 蝶形骨洞	(-) (ope)	不明	不明
10) 中島 成人 ¹⁴⁾	1978	Grawitz	*蝶形骨洞, 骨転移	5-Fu のみ	3 年	生存
11) 黒田 道弘 ¹⁵⁾	1967	*Grawitz	鼻 腔	(-) (ope. RT)	8日 (9ヶ月)	死亡
12) 清水 清一 ¹⁶⁾	1965	Grawitz	*鼻腔, 口腔, 副鼻腔	不 明	2年2ヶ月	死亡
13) 甲能 直幸 ¹⁷⁾	1978	肺	*鼻尖部	不 明	直後	死亡
		胃	*篩骨洞	不 明	直後	死亡
14) 増野 精二 ¹⁸⁾¹⁹⁾	1980	Grawitz	*前頭洞	ope. (Embolization)	不明	生存
	1979	Grawitz	*上顎洞	ope. RT (-)	4 ヶ月	死亡
	1979	Grawitz	*眼窩, 副鼻腔	ope (ope)	7 ヶ月	生存
	1979	Grawitz	*脳, 肺, 篩骨洞	RT (不明)	不明	生存
15) 宮本 浩明 ²⁰⁾	1982	*乳 腺	蝶形骨洞, 骨	RT. 抗エストロゲン	1.5年(6.5年)	生存
16) 松村 久 ²¹⁾	1948	*絨毛上皮腫	鼻腔, 歯ぎん部	(-)	直後	出血死
17) 川本 智 ²²⁾	1970	*絨毛上皮腫	鼻腔, 肺	RT. chemo	1ヶ月 (1年)	死亡

*: 初発症状を示した病巣

図10 S状結腸癌病理組織所見. 図8, 9の上顎洞癌の組織所見と非常に似かよった腫瘍細胞並びに硝子像がみられる.

図11 転移経路

路が鼻, 副鼻腔への転移経路として重要視されているが, 本症例においては, 肝, 肺転移が早期よりみられる事から, 第一の経路がむしろ大きく関与しているようである.

なお, 里見ら⁶⁾は124例の腎癌について検討を加え, そのうち耳鼻咽喉科領域への転移は, 耳下腺2例, 舌1例, 鼻腔1例, 歯肉1例の計5例(4%)で脳転移に匹敵する頻度であり, 耳鼻咽喉科領域への転移は, それ程稀ではないことを示唆している. しかし, 実際には耳鼻咽喉科領域への転移の報告例は少なく, その理由としては, 他臓器より鼻, 副鼻腔へ転移する事が稀であると共に, 鼻, 副鼻腔への転移性腫瘍が症状をあらわす前に, 原発腫瘍の他臓器への転移等の為, 死亡する事もあり, 耳鼻咽喉科領域で十分な精査がなし得なかった例もかなり多いと思われる.

最後に, 一般には稀な病理組織型の腫瘍を鼻, 副鼻腔領域に認めた場合, 転移性腫瘍も考慮に入れ, 原発巣の発見, 治療に対処しなければならぬと思われた.

結 語

- 1) 74才, 女性の非常に稀なS状結腸癌よりの転移性上顎洞癌症例を報告した.
- 2) 現在までの本邦における他臓器よりの鼻, 副鼻腔転移報告例について文献的に考察した.

尚, 本論文の要旨は, 日本耳鼻咽喉科学会第11回中国地方部会連合講演会に於て発表した.

参考文献

- 1) Perls M : Beiträge zur Geschwulstlehre. Virch Arch 56 : 437~467, 1872.
- 2) 溝尻源太郎 : 転移性篩骨洞精上皮腫の1例. 耳喉 52 : 1053~1057, 1980.
- 3) Friedmann I and Osborne DA : Metastatic tumors in the ear, nose and throat resion. Jour Laryngol and Otol 79 : 576~591, 1965.
- 4) Bernstein JM : Metastatic tumors to the maxilla, nose and paranasal sinuses. The Laryngoscope 76 : 621~650, 1966.
- 5) Nahum AM and Bailey BJ : Malignant tumors

- metastatic to the paranasal sinuses. The Laryngoscope 73 : 942~953, 1963.
- 6) 里見佳昭, 他 : 腎癌の耳鼻咽喉科領域 (耳下腺, 鼻腔, 舌, 歯肉) への転移症例. 臨床泌尿器科 28 : 43~48, 1974.
- 7) 雑賀 宏, 他 : 鼻腔転移をきたした大腸癌の一症例. 耳鼻臨床 75 : 795~800, 1982.
- 8) 山本 誠, 他 : 重篤鼻出血を主訴とした腎癌 (Grawitz 腫瘍) の鼻, 副鼻腔転移症例. 耳喉 52 : 323~327, 1980.
- 9) 小林秀夫 : 上顎洞に転移せるへパトームの稀有なる 1 例. 日耳鼻 54 : 184~187, 1951.
- 10) 浅井良三, 他 : 鼻腔, 副鼻腔転移により発見された Grawitz 腫瘍の 1 症例. 耳鼻臨床 53 : 939~947, 1965.
- 11) 河合純一郎, 他 : 篩骨蜂巣に発生せる Hypernephrom の 1 例. 日耳鼻 61 : 315, 1958.
- 12) 松崎 久, 他 : 60才女性の鼻中隔部に発生した絨毛上皮腫の一症例. 日耳鼻 70 : 11 : 1941, 1967.
- 13) 渡辺雄司, 他 : 鼻副鼻腔に転移した腎 clear cell carcinoma の病理組織学的観察. 鼻副鼻腔 20 : 66~67, 1981.
- 14) 中島成人, 他 : 蝶形骨洞および多発性骨転移を来した腎腫瘍 (Grawitz's Tumor) 例. 耳鼻 24 : 198~204, 1978.
- 15) 黒田道弘 : 鼻内転移を惹起せる Grawitz 腫瘍症例. 耳鼻臨床 60 : 109~112, 1967.
- 16) 清水清一 : 鼻, 副鼻腔及び口腔にあらわれた Grawitz 腫瘍剖検例. 日耳鼻 68 : 1522, 1965.
- 17) 甲能直幸, 他 : 鼻副鼻腔領域における転移癌について. 鼻副鼻腔 16 : 124, 1977.
- 18) 増野精二, 他 : 前頭洞に転移した Grawitz 腫瘍の一症例について. 鼻副鼻腔 19 : 209, 1980.
- 19) 増野精二, 他 : 鼻副鼻腔及び頬部に転移した Grawitz 腫瘍の 3 症例について. 鼻副鼻腔 18 : 180, 1979.
- 20) 宮本浩明, 他 : 乳腺腫瘍の遅延型蝶形骨洞壁転移症例. 耳鼻臨床 75 : 2559~2565, 1982.
- 21) 松村 久 : 鼻部及び歯齦部に転移した悪性絨毛上皮腫の一例. 耳鼻臨床 41 : 9~12, 1948.
- 22) 川本 智, 他 : 鼻腔転移をきたした絨毛上皮腫の 1 症例. 耳鼻臨床 63 : 481~488, 1970.

(別刷請求先 : 世良公志
〒728 三次市十日市町650
双三中央病院耳鼻咽喉科)